

長距離男が評価

MGC、河野氏(陸連)が評価



河野匡氏

2020年東京五輪に向けて日本の陸上界が知恵を絞って導入した代表選考会「マラソングランドチャンピオンシップ」(MGC)は停滞していた長距離界を活性化させる効果があった。15日、男女2枚の切符を争ったレース後、仕掛け人の一人である日本陸連長距離・マラソンディレクターの河野匡氏(大塚製薬陸上部長)は「選考と強化を融合した仕組みで、誰が見てもは

つきりした(代表選考)結果になった」と意義を強調した。(1面参照)
MGCで、日本陸連は求める代表像を明確にした。従来は複数のレース結果を比べて「本番で戦える」と理事会が判断した選手を選ぶ方式。基準が曖昧

で物議を醸すことも多く、選手の精神的な負担が大きかった。今回は地元五輪の重圧に耐えうる勝負強さと調整能力を重視し、一発勝負のMGCで2位に入れば代表とすることを示した。ある実業団の指導者は「今までのもやもやとしたも

ていない過去の例を踏襲し、MGC出場は近々シーズン間に一定の条件をクリアした選手に絞った。これで選手を含めじっくりと若手を育てたい」とマラソンに取り組み手が増え、日本新記録に1億円を出す日本実業団陸上競技連合の報奨金制度も相まって、男子で設楽悠太(ホンダ)、大迫傑(ナイ

闘病児童 地元で学びたい

う啓発イベントを同市の徳島大学病院で開いた。県内外の小学生3人の母親が、地元の学校で学べる環境づくりの必要性を訴えた。

筋ジス患者・内田さん(徳島市)企画の催し

保護者 支援や理解訴え



地元の学校で学べる環境づくりを訴える細川亜弥さん(右端)＝徳島市の徳島大学病院

人工呼吸器を着けて板野支援学校(板野町)に通う小学部3年細川彩姫さん(8)と母亜弥さん(34)＝阿波市阿波町本町、広島市の2組の小学男児と母親が参加。内田さんが進行役を務め、学校と日常生活での苦労や人工呼吸器を着けて喜びについて意見交換した。

勧められたとし「地元の小学校は、人工呼吸器や医療ケアが必要な子どもは受け入れないことになっている」と話した。彩姫さんが使う大きな車いすは、多目的トイレでも手狭だと指摘。「車いす利用者が関わりながらバリアフリー化を進め、地域が変わってほしい」と力を込めた。

母親と聞いた生光学園小2年の内藤大世君(8)は「人工呼吸器を着けていても同じ小学校で遊んだり、勉強したりできる世の中がいい」と望んだ。

イベントには県内外から約40人が参加。難病の子どもらに密着したドキュメンタリー映画「風よ吹け! 未来はここに!」の上映もあった。

(南志郎)

難病の筋ジストロフィーと闘いながら1人暮らしを続ける内田由佳さん(37)＝徳島市八万町下福万＝が15日、人工呼吸器を使う児童の現状について知ってもら

徳大病院

発信

重郎さん死去

関係者「志」継承へ

15日死去した阿波踊りの名手・阿波生重郎さん(87)の遺志を継承する関係者が、阿波踊りの魅力を伝える活動に取り組んでいる。

阿波生重郎さん(87)は阿波踊りの名手として知られ、阿波踊りの魅力を伝える活動に取り組んでいる。

阿波踊りはみんなが踊りたい。阿波生重郎さん(87)は阿波踊りの名手として知られ、阿波踊りの魅力を伝える活動に取り組んでいる。